

想稿

北村想

銀河鉄道の夜

想稿・銀河鉄道の夜

1986年11月25日 第1刷発行

定 価 1500円

著 者 北村想

発行者 宮永捷

発行所 有限会社而立書房

東京都千代田区神田神保町1丁目20番地

振替・東京9-174567／電話 03(291)5589

印 刷 科学図書印刷株式会社

製 本 大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかいたします。 0074-0903-3359

© Sou Kitamura, Printed in Tokyo, 1986

想稿

銀河

鉄道

道

の

夜

北村想

目次

想稿・銀河鉄道の夜

5

BUDORI——眠れぬ夏の月——

91

装幀・高麗隆彦

想稿・銀河鉄道の夜

——世界でいちばん最後に幸せになる人のために——

登場人物

ジョバンニ

カムパネラ

国語の教師

生物の教師

生徒たち（マルソ、¹⁴ペンベル、⁵キエフ）

サネリ

印刷所の老人

印刷所の人々

ジョバンニの母

尼僧

大学士

その助手

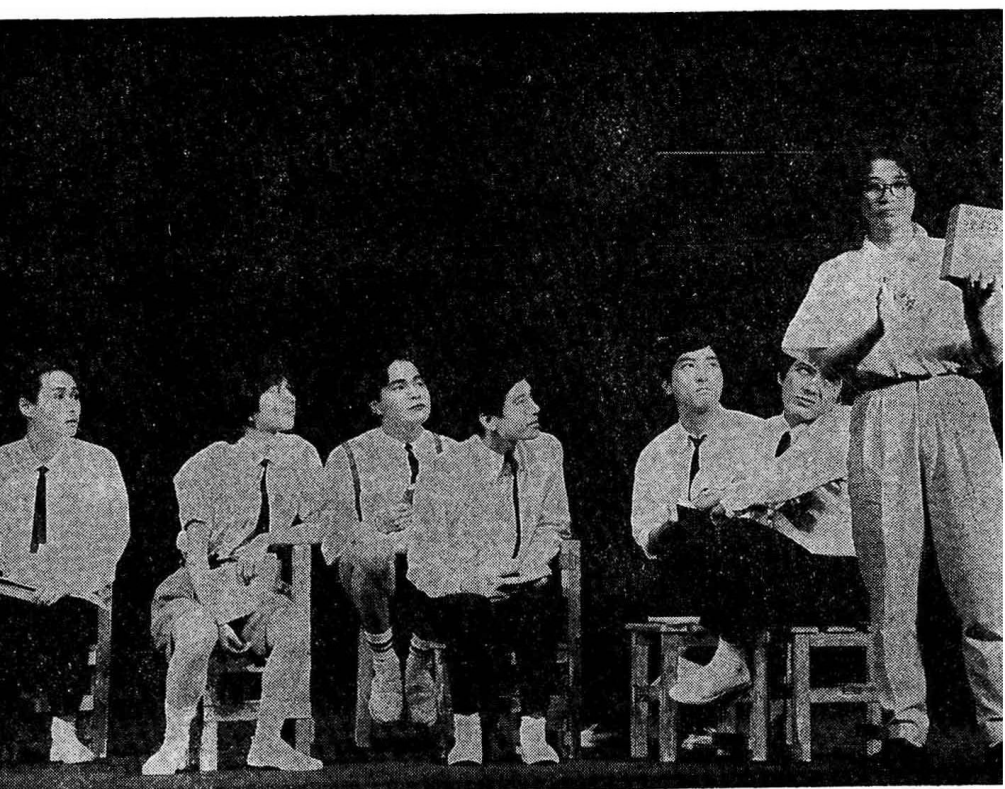
鳥捕り

青年

少女

ゴムボートの人々

車掌



プロローグ——光の中で——

空気がちょうどそこいっばいの密度になったところ、私たちは次のような英語の無線交信を聞く。

10、9、8、7、6。主エンジン点火。4、3、2。1、発射。

——機体の回転開始。

——こちら了解。機体回転を確認。機体は現在下向きの軌道にある。エンジンスロットルは現在九四パーセント。間もなく六五パーセントに下げる。エンジン出力六五パーセント。エンジンは三基とも正常に働いている。燃料タンクはSRB、ETとも正常。補助動力源三基とも異常なし。秒速二万二千五十七フィート、高度4・3カイリ、発射台からの水平距離三カイリ。エンジン全開へ。出力上昇す。

——出力上昇す。

——発射後一分十五秒。秒速二千九百フィート、高度九カイリ。発射台からの水平距離七カイリ。……私たちは空の彼方に鈍い爆発音を聞く。

そうすると、辺りは真っ暗になり、やがてその静寂の中に子供たちの騒がしい声がしてくる。

次第に明るさをとりもどす世界に、私たちはおそろくずっと昔の、懐かしい小学校を見るだろう。あの木造の、あの風に鳴る窓ガラスの教室を。

1 午後の授業

昼休みの終わりの慌ただしい喧噪につつまれながら、静かに生徒たちの到来を待っている理科教室。風采のあがない国語の教師が通り掛かる。

しきりに周回を気にしながら、教室を覗き込んでいる。

カムパネルラの声が聞こえてきた。

カムパネルラ （軽く歌っている）へ地にはふらせよ露をケンタウルス、

国語の教師は慌てて引っ込んだ。

カムパネルラが来た。

理科教室の戸を開けて中に入った。黒板にジヨバンニの悪口が書かれてある。

カムパネルラ しょうがないな。きつとザネリのやつだ。

ひとりごとを言いながら、黒板の落書きを消しはじめた。

またあの国語の教師がやってきた。カムパネルラをじっと見ていたが、

国語の教師 カンちゃん。

カムパネルラ ?……(教師に気がついて)カムパネルラです。

国語の教師 ああ、カムパネルラ君。次、理科ですか。

カムパネルラ はい。

国語の教師 ああ、そう。理科か。理科ね。……ああ、あの、先生は、国語です。なんとならば、先生は国語の教師ですから、もう、ずっと国語です。朝から晩まで国語です。もう、あいいうえおかきくけこばかりです。はい。

カムパネルラ 先生、何か用事ですか？

国語の教師 いえ。……ああ、あの、あれですね、その、理科の先生は誰でしたか。

カムパネルラ 原先生です。原先生に何か用事ですか？

国語の教師 (なんだかとてもドギマギして) いえ、用事ありません。もし、用事あったら、先生は先生どうしますから、その、職員便所で、

カムパネルラ 職員便所？

国語の教師 いえ、職員室です。職員室で話しますから、いいんですよ。

元気な歌声が聞こえてきた。ジョバンニだ。

国語の教師 あれ、誰かきましたね。

カムパネルラ ジョバンニです、きっと。

ジョバンニが教室に入ってきた。

国語の教師 やあ、ジョバンニ君。

ジョバンニ あれ？ 先生、何してるんですか？

国語の教師 いやあ、その、なんかね、通りがかったら、理科室があったもんだから、ああ理科室だなあって思つて。……

カムパネルラとジョバンニの怪訝な顔。

国語の教師 ……さあ、もう時間だな。じゃあ、行きます。

そそくさと出ていった。

入れ違いに生徒たちがひとりふたりしてやつてきた。それぞれにそれぞれのニュースを語っている。カムパネルラは本を読みはじめた。

マルソ 今の、国語のミヤザワ先生でなかった？

ペンベル そう。

マルソ きっと原先生に気があるんだ。

ペンベル そつ。きつとそう。

マルソ なんか、この辺うろついてるもんな。

ペンベル うん。きつとそう。

とりまきを従えて、歌いながらザネリがきた。

ザネリ ザネリよく今夜もありがとう

とりまきが拍手する。

ザネリ 喉の調子がよくねえな。おーい、みんなちょっと集まってくれ。実はよお、俺、今夜の歌合戦でサンバ歌おうかと思ってんだ。それでちょっと歌ってみっからよ。聞いてろよな。

出鱈目のサンバを歌いはじめたが、窓のそとに何かを見つけた。

ザネリ あれ？ あれ？ あれれ？ あつ、おおい、ちよつと、みんな見てみる。

ペンベル 何だ？

ザネリ 女の人だ。

ペンベル 女の人？

ザネリ そだ。ほら見れ、あっちの土手から手を振ってる女の人がいる。

ペンベル あっ、こりゃたまげたな。おい、皆きてみる。

そぞつとざわめいて、子供たちは窓に駆け寄った。

マルソ 何だあれは、あれは大人の女だな。

ザネリ そだ。そだよ、大人の女だ。

キエフ あれは、外人じゃないかい？

ザネリ おお、そだよ。あれは外人の人だ。

マルソ 手を振ってる。

ペンベル 誰か手を振ってやれよ。

ザネリ よし、俺が振る。おい。

ジョバンニとカムパネルラも席をたって窓に近づいた。

なるほど、三十を少し過ぎたかにみえる外人の女性が土手の上を歩きながら、にこにこ笑顔でこちらに

手を振っている。

ジョバンニ 外国の女の人だね。どこの国の人かな？

カムパネルラ ああ、きっとあれはアメリカの人かイギリスの人だ。僕は前に世界画報で見たことがあるよ。

ジョバンニ アメリカ人かい。

カムパネルラ うん、きっとそうだ。アメリカの人だ。

ジョバンニ この学校にくるのかな。

カムパネルラ いや、行ってしまうよきっと。

カムパネルラがいったとおり、その女の人行ってしまった。

ペンベル ああ、いってしまふ。

ザネリ おうい、さようならあつ！

生徒たち さようならあつ！

ジョバンニ 行ってしまったね。

カムパネルラ うん、行ってしまった。

ジョバンニ よく分かったね。あの女の人が行ってしまったって。

カムパネルラ うん。

ジョバンニ どうしてだい？

カムパネルラ (それには答えず。窓の外を見ている)

午後の授業の始まりの鐘が鳴った。

生徒たちはそれぞれ席につく。

カムパネルラはまだ窓の外を見ている。

ジョバンニ カムパネルラ、先生がくるよ。

カムパネルラ ああ。

ジョバンニ ねえ、カムパネルラ、僕は理科、好きだよ。

カムパネルラ うん、僕も理科好きさ。

先生がきた。眼鏡をかけた若い女の先生だ。

起立、礼。

先生 出席をとります。